

小学校～それは小さな社会～

市内のある会合で、十日町市の教育長が「小学校～それは小さな社会～」という映画を紹介されました。是非見てほしいとのことでした。たまたま機会を得て、その映画を見ました。映画の概要を紹介しながら、小学校の教育について考えてみたいと思います。

映画の舞台は、東京都世田谷区のある小学校。1年間の様子を写したドキュメンタリー映画です。ナレーションもありません。桜咲く入学式から翌年の卒業式、4月の始業式までの様子で特に特別活動を中心に撮影されています。どこにでもある普通の小学校の姿だと思います。

この映画を見た後で、改めて小学校の先生方は大変だな。でも小学校であのように育ててもらっているから、中学校の教育活動が成り立っていると思いました。映像としては、小学校の日常であり、当たり前に行われていることだなというのが印象でした。

この映画は、諸外国、特に教育先進国フィンランドですごい反響だったそうです。その記事に私は正直なぜだろうと思いました。

数日後読んだ「教職研修」という雑誌にこの映画の話題が掲載されていました。NHKの記者である西川龍一さんが、監督の山崎エマさんにインタビューしています。それがとても印象に残ります。
引用：「教職研修 2025 年 4 月号」教育開発研究所発行

インターナショナルスクールやアメリカの大学生活の中で、周囲から「責任感がある」とか「チームへの貢献度が素晴らしい」とよく言われた。自分では特別なことはしていない。普通にふるまっているのになぜと思ったそうです。

「アメリカでは食事のあと、誰も自分で片づけないんですよ。私は普通に片づけていた。ランドセルを6年間、大切に使い続けることも当たり前だと思っていたけど、アメリカだったら、毎年新しい鞆を買います。そうしたことを諸々考えたとき、私のたどりついた考えは日本の小学校で授業を受けたことだったんです。」

この映画のタイトルは「THE MAKING OF A JAPANESE」。「日本人の作られ方」という意味であり、映画の公式サイトでは、「6歳児は世界のどこでも同じようだけれど、12歳になる頃には、日本の子どもは“日本人”になっている」と書かれています。



また、別のサイトで山崎さんは、

「運動会の種目、例えばピラミッド。練習の初日には絶対に無理だと思った課題が、みんなで力を合わせて何週間も練習すると、何とか形になってくる。本番の前に、絶対に失敗はできないと決意する緊張感。無事ピラミッドを完成させた達成感。友達と泣きながら喜んだ感動。この体験が今振り返ってみた時、目の前にある課題に頑張って取り組む原点になっていると思います。ここを頑張ればその後の景色は変わる、という体験を11歳、12歳でする。貴重なことです」 余談ですが、ピラミッドは危ないことから、最近やらないようですね。

「子どもからしたら運動会や音楽会は一大行事で、日本の学校生活では『人生のヤマ場』のような機会が6年間で繰り返し訪れる。インターナショナルスクールの運動会は何の練習も

せず、その日だけ参加して走って終わりです。集団生活の中で学んでいくやり方ではない。隣の子と何が違って何が得意なの？と、個性を作っていくところを優先するのが欧米の価値観です」

山崎さんは思いやり、助け合いと責任感についても語っています。

映画の中には心温まるエピソードとともに、靴入れの中の上履きがきっちりそろっているかどうかをチェックする当番児童や、卒業式で一糸乱れぬ所作を要求する指導など、「そこまでやるのか」と感じるシーンも登場する。教員らの研修風景では、大学教授が講演で「日本の教育が求める集団性の強さと協調性は、いいことばかりではない。両刃の剣で、同調圧力につながる。」と指摘する場面が盛り込まれています。

それでも、山崎さんは「隣の子どもの悩みを自分のことのように受け止める助け合いの精神、思いやりの気持ちを尊重する日本の小学校は優れている。この映画の最大のメッセージはそこにある」と強調しています。

「実際に、外国で人々がこの映画に感動し、『日本の子どもたちはすごい』との声を数多く聞いた。フィンランドで『コミュニティづくりの教科書。自分たちの教育を見直す場になった』との感想があったが、その背景には自由優先の価値観で進めてきた結果、自分のことしか考えない子どもが増える中で、日本のやり方からヒントをもらえるのではという気持ちがにじみ出ていると感じました」

山崎さんが最も驚いた海外の上映現場での反響。それは、常にサッカー・ワールドカップ（W杯）の日本チーム応援団による試合後の「ごみ拾い」のエピソードが引き合いに出されたことだと言います。



「そんなに世界中で有名なのかと思うくらい、どこに行っても映画の内容が『ごみ拾い』の行動の理由として解釈されていました。そこにあるのは、『日本人はきちっとしている』とか、『プロフェッショナルが多いな』という認識です」



「日本の子どもは学校で、小さいころから責任を与えられるわけです。教室の窓を開ける係から給食当番、掃除当番などなど。与えられた役割をきちっとやる責任感というのが、DNAに入ってしまうのではと思うくらいです。それがプラスに機能する場合もあれば、逆にその責任感・使命感に苦しめられている人もいるのが、今の日本の社会です」

山崎さんのコメントを読み、日本では当たり前のことが諸外国では当たり前でないこと、日本の小学校が担っている役割の重要性を思いました。とはいえ、私たち日本人はその価値に気付いていないこともあるのだと思いました。この素晴らしい日本の教育を理解したうえで、今学校に求められている課題に取り組むことが大切だと思いました。

職員会議の場面で、職員に次のような話をしました。

「入学してきた生徒たちも、中条中学校の生活の中で『中条中生』となっていく。当校の不易と流行を意識しながら、伝統として継続していく面と、生徒の実態に合わせて見直す部分を明確にしていきましょう。」まさに『THE MAKING OF A NAKAJO STUDENTS』です。

残念ながら、現在県内でこの映画を上映している映画館はありません。You Tube で検索すると映画の予告や短編の動画、山崎監督のインタビュー動画を見ることができます。特にインタビュー動画は考えさせられる内容でした。お時間があれば是非見てもらえたらと思います。

引用 nippon.com 「日本の普通」に世界が驚いた

: 映画『小学校～それは小さな社会～』を制作した山崎エマ監督 <https://www.nippon.com/ja/people/e00227/>